

私学教育の魅力

－変革期の私学教育の展望－

一般財団法人東京私立中学高等学校協会 副会長

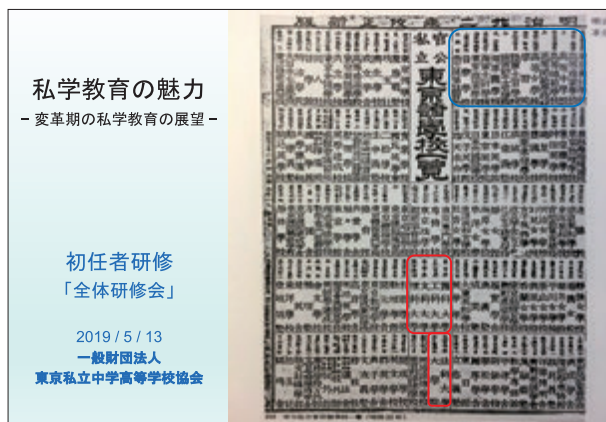
順天中学高等学校 校長

長塚 篤夫

皆さんこんばんは。東京の私学にご採用おめでとうございます。昨年採用の方もいらっしゃるかもしれませんが、東京の私学の仲間になっていただいたこと、本当にうれしく思います。今日は「私学教育の魅力」というテーマで、私からご紹介する形で皆さんと一緒に学びたいと思っております。

夕方6時からという、働き方改革に逆行するような時間で申し訳ないのですが、私も頑張りますので、皆さん、しばらくの時間おつき合いいただきたいと思います。

○イントロダクション



さて、資料をごらんいただいて、自分の学校はないですか。これは新聞ですけれども、明治22年の東京にある全ての学校の一覧です。明治22年です

から、創立 130 年ぐらいたっている学校でないと見つかりません。学校名も変わっているかもしれません。さて、どうでしょう。皆さんの学校はあるでしょうか。

これは官公私立一覧というもので、当時東京にこんなにたくさん学校があったというものです。公立も多かったのだと思うかもしれませんが、官公立は右上の青い囲みの中だけです。その中に学習院がありますが、学習院は最初官立です。皇族のための学校ですから。戦後、私学になったという変遷があります。あとは全部私立と言ってもいいぐらいです。

下の赤い囲みの中に大学も 5 つ 6 つありますが、これは全部東大です。明治 22 年はまだ日本に大学は 1 つしかなかった。これは分科大学といいまして、分かれているのですが、実際には 1 つの東大です。東京大学が明治 10 年にできて、明治 30 年に 2 つ目の京都大学、明治 40 年に東北大学ができて、明治末に 4 つ目の九州大学ができたぐらいですから、明治時代には帝国大学として 3 つ 4 つしかなかった。さすがの早稲田、慶應義塾なども、正式に大学となったのは大正からです。

今、日本には 780 近く大学があります。皆さんはそれぞれ大学を出ていらっしゃるわけですが、今挙げたような大学以外はその後にできたもので、新しいのです。東大にしても 140 年前にできたばかりです。そのほかここに書かれているほとんどは、いわば今で言う私立の中高ですね。女子校もミッション系など、いろいろあります。

明治の最初、日本の人口はどれぐらいだったかわかりますか。約 3,000 万人ちょっとです。意外にも東京府は 100 万人です。今の東京都ですね。3,000 万人のうちの 100 万人しか東京にいなかった。明治元年は 100 万人から始まったのです。今はどうですか。1 億 3,000 万人の日本人のうちの 1,300 万人が東京でしょう。1 割です。随分と東京に集まってくるようになったわけです。

今年の大学進学がなかなか厳しかったというのは、東京に集中している人口、特に学生を地方に分散させようと、私立を中心に 23 区内の大学の定員を厳格化したことが影響しています。ここ 2、3 年の間、地方活性化政策のあおりを高校 3 年生が受けているわけですが、学生の東京一極集中は明治から始まっています。

つまり、当時 100 万人程度しかいなかったこの東京という町に何でこんな

に学校があったかと言うと、理由は簡単です。東京大学に入るためです。全国から、さらに後には中国や韓国、台湾あたりの海外からも、留学生として上級学校を目指すという目的で、東京に集まってきたのです。

その後、日比谷高校を初めとする都立高校の前身をつくり始める段階で、東京府議会では「公立学校を増やすのもよいが、私立がこんなにあるのだから（今で言う中等教育は）私立に任せたほうが財政的にもよいのではないか」という意見が出ていました。

ところが、最終的に1票差で「いや、やはり公立もつくるべきだ」という意見が勝り、実はそんな流れで、現在都立高校が約200校、私立高校が240校弱、私立中学が180校ぐらい東京にはあるのです。——というようなことが連綿と続いてきて現在があるということ、その中の1校に皆さんがお勤めなさっているということ。まずこの東京の状況を、時間軸で認識することは非常に大事だと思ってお話ししました。

1、社会の未来 & 子供の未来

2、子供の課題 & 教育の課題

3、教育課題の一斉改革開始

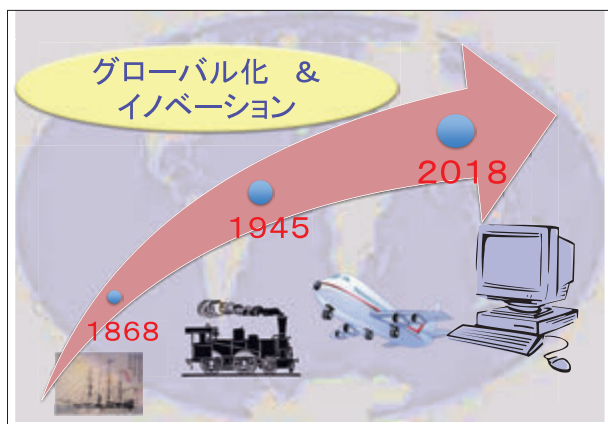
4、建学精神が私学の魅力に

1、社会の未来 & 子供の未来

さあ、今日は4つに分けて話を進めたいと思っています。1つ目は「社会の未来 & 子供の未来」——これからどうなるかです。今、過去の話をしました。もう一度時間軸を振り返りながら行きたいと思います。

1853年（嘉永6年）にペリーがやってきて、その15年後に開国したわけです。国を開くですから、今で言えばグローバル化ですか。そして、蒸気機関車が

横浜－新橋間を走るようになり、こうして技術革新とグローバル化は同時に起きたわけです。



やがて飛行機——飛行機は1902年にライト兄弟がやっと動力エンジンを載せて飛ばしたものですから、本当に1世紀くらい前にできたものです。明治の初めにはなかった。しかし今、この乗り物に乗って人々は簡単に国境を越えられるようになりました。

日本人が海外に自由に渡航できるようになったのは戦後しばらくして、1964年です。前の東京オリンピックがあった年に、日本の一般人は海外に行けるようになったのです。それまでは特別な人しか行けなかった。外貨がなかったからです。なぜか。1945年の終戦時、日本は負けて外貨を失っていたわけです。貧しかったのです。

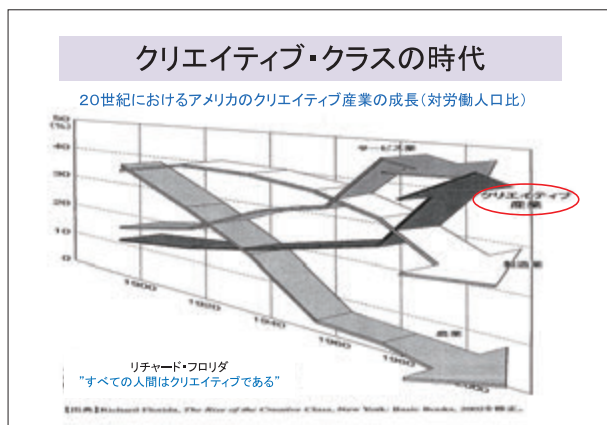
ちなみに、東京の人口が増えてきたと言いましたが、1945年あたりはちょっと減りました。疎開をしていましたから。または空襲でやられました。皆さんの学校も、多くは戦災で校舎を失ったり、子供たちも犠牲になったり、大変な思いをしたのです。戦時中はまともに勉強もできなかった。戦争に遭遇した卒業生とそうでない卒業生では全く違った印象の学生時代を語ります。そういう意味では、やはり平和であることは本当に大事だと思います。言うまでもなく子供たちの人生を変えてしまうくらいのことです。

今年は令和元年ですが、明治から150年です。150年間の真ん中の節目である1945年以降、戦後復興とともにグローバル化が進みました。1980

年あたりからは、インターネットを使って自由に情報が行き交うようになりました。人が国境を越えなくても、情報を瞬時に世界中から集められるようになったのです。そして、3,000 万人を超える人がインバウンドとして海外から日本へやってくるようになりました。そういう時代です。明治維新、終戦、そして今、グローバル化が進んでいるわけです。

学校教育では、英語ブームと理数ブームが同時に起きます。明治の最初の頃、英語ブームが起きたのは当たり前ですね。学問分野はもちろん、殖産興業に向けた西洋文物の導入です。また、戦後も英語ブームが起きました。理数ブームもやはり同じような理由です。アメリカに負けて、あの物量に負けてしまったということで産業を興した。日本の大学院の4割は工学部です。テクノロジー、エンジニアリングです。こういう国はないのです。とにかく科学技術を大事にして日本を興したわけです。

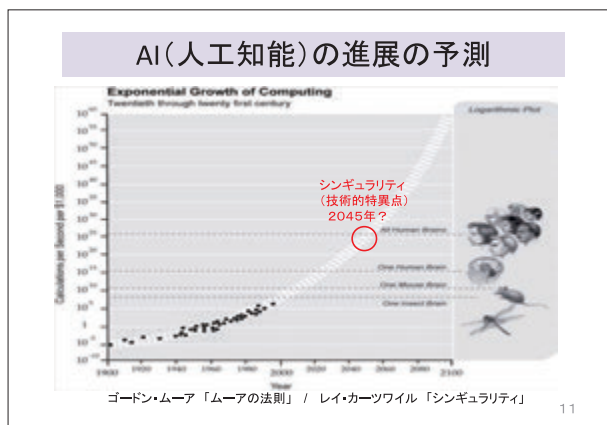
ところが、今のこのグローバル化は、同じ産業といってもちょっと状況が変わってきた。ICT、ソサエティ 5.0——そんなことを考えると、これからの子供たちに必要な教育は何かということがおのずとみえてくるはずです。教育を基本から変える動きが始まっています。



我々が若い頃は、日本はアメリカの20年後を追っているとよく言われましたが、アメリカの20世紀、この100年間を振り返ってみますと、こういうことです。20世紀のアメリカでは農業人口（第1次産業）は廃れて、製

造業（第2次産業）もだんだん従事者が少なくなり、サービス業（第3次産業）が増えました。ところが、1980年代から第3次産業もちょっと下がってきます。リチャード・フロリダという社会学者が『クリエイティブ・クラスの世界』という本に書いたものですが、クリエイティブ産業が増えてきているのです。

こんな分類は日本の産業分類にありませんが、経産省が調べたところ、日本でクリエイティブと言われている分野で成功しているのはアニメとロボットの一部だけです。それぐらい創造性の乏しい産業構造になっているのです。皆さんはどの分類にあるかという、サービス業ですね。サービス業でも創造性がない分野の仕事だと、それは廃れていく。農業であってもクリエイティブな部分があれば、それは伸びていきます。そういう意味合いなのです。そのようにして将来の仕事が変わっていくということを予見してくれています。



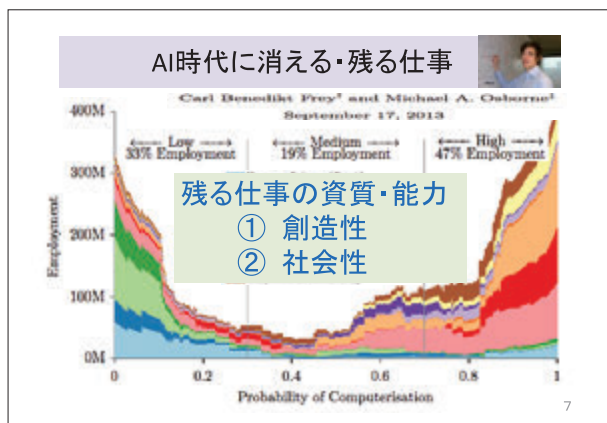
そして未来について、新たにリアルな問題になってきたのは、AIに関する知見です。シンギュラリティ（技術的特異点）を信じるかどうかは学者によっても分かれますが、ゴードン・ムーアの「ムーアの法則」というものがあります。コンピューターの性能の変化を見ると、18か月、つまり1年半でコンピューターの性能が2倍になっているのです。

それを追論していくと、デスクトップのコンピューターレベルで、2030

年頃に1人の脳と同じぐらいの性能になるそうです。10万円ぐらいのデスクトップです。本当かなと思うかもしれませんが、そして、2045年には地球上の全人類と同じぐらいの性能を持つようになるというのがシンギュラリティです。

「そんな安いデスクトップコンピューターでできるはずはない」と思うかもしれませんが。たしかに量子コンピューターでないとこんな性能は出ませんが、ご存じでしょうか。IBMがネット経由で量子コンピューターを無料で使わせてくれているのです。まだ発展途上ですが、基礎的なものは誰でも無料で使えるのです。それを使って新しいものをつくり出している人がいるというくらいですから、案外これは可能性があります。

シンギュラリティを過ぎるとその先はどうなるかわからないと言うのです。これを言ったレイ・カーツワイルは、シンセサイザーや皆さんが日々お世話になっているスキャナーを発明した人です。彼自身が最先端科学技術の発明家ですから、意外と信憑性があります。シンギュラリティあたりになると、もうどうなるかわからない。「AIがAIを生み出す」と言う人もいるし、「そんなばかな」と言う人もいます。分かりますね。



そういうことを踏まえて、近未来の仕事の状況を分析した人がマイケル・オズボーンです。イギリスのオックスフォード大学の准教授でしたか。もう1人の方と一緒に研究したわけですが、アメリカの700余りの仕事を

分類しました。そして、コンピューターに置きかえられてしまう可能性——「Probability of Computerisation」と書いてありますが、この可能性によって仕事を3つに分けたわけです。AIに置きかえられる可能性が高いものとして、例えば事務職や高校の先生などがあります。小学校の先生はそうでもない。小学校の先生と高校の先生で比べればわかるのですけれども、結論的に言うと社会性の必要性ですね。小学生に必要な人間的成長、社会性を育てるためには、いくらコンピューターを駆使してもだめです。

コンピューター、AI ロボット君にできないことは何かと言ったら2つだけなのです。新しいものをつくり出す創造性と、人のように思いやりをもって接する社会性ということ。ですから、残る仕事の資質・能力はこの2つだということをわかっていれば、これからやるべき教育というのはおのずと見えてきます。

47%の仕事が自動化されるとオズボーンは言ったのですが、日本の仕事ではどうかということで野村総研がオズボーンと一緒に研究したら、47%ではなくて49%という割合が出ました。ほぼ同じですね。実はこれはグローバル化によって、世界中の仕事がほぼ同じような仕事になってきたことを物語っています。求められる資質・能力もそうです。これらの話全体が、アメリカでも日本でも同じように仕事が置きかわっていくということを意味しています。

子供たちの未来

- 子供たちの**65%**は、大学卒業後、**今は存在していない職業**に就く。

(キャシーデビッドソン氏 ニューヨーク市立大学大学院教授)

- 今後10年～20年程度で、約**47%**の**仕事**が**自動化される**可能性が高い。

(マイケル・オズボーン氏 オックスフォード大学準教授)

- 2007年に日本に生まれた子供は、**107歳まで生きる確率**が**50%**ある。

(リンダ・グラットン氏 ロンドン・ビジネススクール教授)

日本の働き方改革に意見したリンダ・グラットンがこんなことを言いました。この方は、政府が働き方改革を議論する際にイギリスから招かれたロンドンビジネススクールの教授ですが、「今の日本の子供たちは100歳まで生きる」と言いました。それで、みんなそのことを知ることになったわけです。日本の子供だけではないのですが、特に日本の子供は長生きするようです。100歳まで生きて、仕事がどんどん変わっていったらどうしたらいいのでしょうか。



～2025年の未来に、充実した仕事をするためには～

- ① 高度な専門知識と技能を習得し続けること
- ② 友人関係や人脈などの人間関係を育むこと
- ③ 創造的に何かを生み出し、質の高い働き方をする

彼女には2人の息子がいます。2人の息子から「お母さん、僕たちが大人になって、大学を出て働くようになったら何が必要かな」と聞かれたとき、彼女は答えられなかった。なので、改めて世界中の自分と同じような研究者たちと研究をし直して、世界のこれからのビジネス、仕事がどう変わっていくかをいろいろ調べ、その結果を『ワーク・シフト』という本に書いたのです。これが非常に売れました。10数年前です。今は『ライフ・シフト』という本も出ています。

この本のエピローグに子供達に向けた手紙が書いてあり、3つのことが大事だということです。まず1つ目に高度な専門知識と技能を習得し続けるということ。知識、技能はどこかで聞いたことがありますね。習得し続けなければいけない、しかも高度でなければいけないのです。ですから、これは皆さんにとっても同じことです。2つ目に、友人関係、人脈などの人間関係を育む。

これはいわば社会性です。これをどれだけ構築できるか。3つ目、創造的に何かを生み出して質の高い働き方ができること。これは創造性でしょう。

これらは皆さんも同じです。彼女の息子たちだけではなくて、皆さんに言われていることなのです。この3つのことができなければ、これからの長い人生を生き生きと、特に仕事でハッピーに過ごしていくことはできないということをビジネス研究の第一人者が言った。その方が働き方改革をリードする1人であったことだけは事実です。働く時間を短くして、ということだけではないのです。効率よく働くだけではなく、どう学び、働き、生きるか。この3つのことがなければだめです。

2、子供の課題&教育の課題

さあ、2つ目の話に行きましょう。「子供の課題&教育の課題」――。

トーマス・ローレン『日本の高校』の序文より
～その成功と代償～

 Thomas P. Rohlen (スタンフォード大学教授・文化人類学者)
1974～1975(昭和49～50)フィールド調査:13つの典型的な高校
1988(昭和63年)日本語版出版(サイマル出版会)

今日の教育がかかえている問題は、日本列島とともに大きい。新しい技術が急激に発展するなかで、より高度な科学やコンピュータシステムの発展に合わせて、教育制度を改造していかなければならぬ。確かにそれは、あらゆる国に共通する国際的な課題だといえる。だが、われわれの教育制度は、その課題の本当の意味を理解して課題解決に取り組んでいるとはいえない。...

日本列島がかかえているジレンマは、学校教育が、ますます技術革新や国際競争というせむちがらぬ目的に適合していくなかで、いかにして人間の心や魂を豊かにし、伝統文化を蓄積(じくく)していくかという点である。このような視点から見て、日本は、バランスがとれているとはとてもいえない。アメリカも...

今日の学校教育には、いったい何が求められているのだろうか。私の考えでは、「学ぶ」ということを教育の中心にするべきだ、ということである。つまり、音楽であれ、幾何であれ、あるいは生徒自身ががかかえている問題を解決することで、多様な学習の技能と喜びを生徒に教えることである。

私が**日本の高校を見て感じるのは、受験制度という重圧のもとで、この点に大きな歪みが生じていることだ。小学校の時点では、生徒たちは世の中についての学習の仕方や問題の解決法を身につけており、この方面で実に見事な成果をあげている。ところが中学校から高等学校にかけて、次第に学習の楽しさや方法が軽視され、教科の成績そのものに開心が固定されるようになっていく。そして、高校の卒業が近づくと、創造的な思考や表現の機会がますます減少し、生徒一人ひとりの異質性が目につくようになる。**

最後に、私は高等教育についてはまったく述べていないが、日本で最も改革を必要としているのは高等教育である。大学が柔軟で進取の精神に富み、人間性にあふれている場合のみに、入試制度の改革が可能となるのであり、ひいては高校の力や学力改革が当然となるのである。

2

トーマス・ローレンという方が『日本の高校』という本を書きました。彼はアメリカの社会学者ですが、日本の教育もアメリカの教育も同じように、いくつか問題があると言っているのです。(資料の)3段目をみると、「『学ぶ』ということを中心にするべきだ」と書いてあります。

問題は(資料の)4段目です。「私が日本の高校を見て感じるのは、受験制度という重圧のもとで、この点に大きな歪みが生じているということだ。(中略)中学校から高等学校にかけて、次第に学習の楽しさや方法が軽視され、

教科の内容そのものに関心が限定されるようになっていく。そして、高校の卒業が近づくにつれて、創造的な思考や表現の機会がますます減少し、生徒一人ひとりの異常性が目につくようになる。」

そして、日本で最も改革を必要としているのは高等教育、大学だと言っているわけです。大学の入試制度はどうすればよいのか。「大学が柔軟で進取の精神に富み、人間味にあふれている場合にのみ、入試制度の改革が可能となるのであり、ひいては高校のカリキュラム改革が可能となるのである」と言っています。問題は、これを彼がいつ言ったかです。1975年と書いてありますから、昭和50年です。40数年前にこれと言っているのです。

文部科学大臣は150年来の教育改革を今おこなおうと言いますが、150年は少し大げさです。140年前に大学は1つしかなかった。それで全ての日本国民が、高校生がと論ずるのは少し話が飛び過ぎています。少なくとも1975年（昭和50年）頃に高校進学率が90%を超えたのです。ほぼ義務教育のように、みんな高校に行くようになった。

もう1つあります。この年に私立学校振興助成法ができました。初任者の方には「私立学校振興助成法って何？」という感じかもしれませんが、毎年この全体研修会で話しているようですので、軽く触れます。

それまで私立学校に通うには自分でお金を払わなければいけませんでしたが。もっとも戦前は、私立も公立も実はあまり学費は変わらず、公立も払わなければいけませんでした。戦後になって、公立学校の教育は公費で全部賄うと憲法以下の法律で決まりました。しかしこの年（昭和50年）から私立にも、国からお金が出るようになったのです。少なくとも昭和49年までは国からも東京都からも補助金が出る根拠がなく、私立に行くためには相当払わなければなりませんでした。

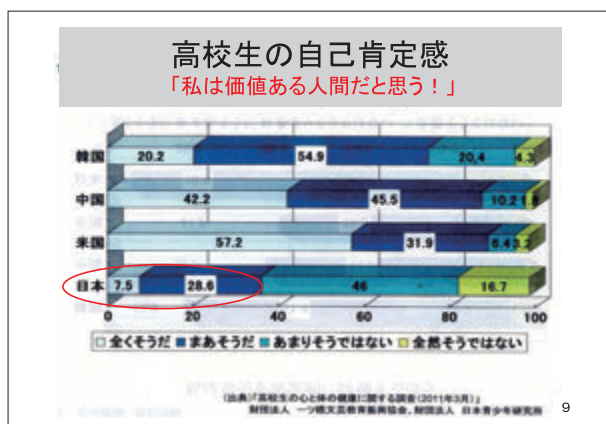
でも、今、高校生には1人当たり年間40万円出るので。それには相当な苦勞をして、父母の会と私学教員が頑張っ、全国の大学や高校、中学校の関係者がトラックに3台分ぐらい——1,000万人だったかの署名を国会に届けたりして、勝ち取ったわけですね。

しかし、私学振興助成法には私立学校に補助することができると書いてあるだけで、補助しなければならないとも書いていないし、いくら補助すべきだとも書いていないので、毎年のように激しく運動しないと実は補助金は出

ないのです。これは政治的な力も必要なので、皆さんも父母の会と一緒に頑張って頑張らなければいけない。そういう運動の成果で今に至って、今の私学があるというお話です。

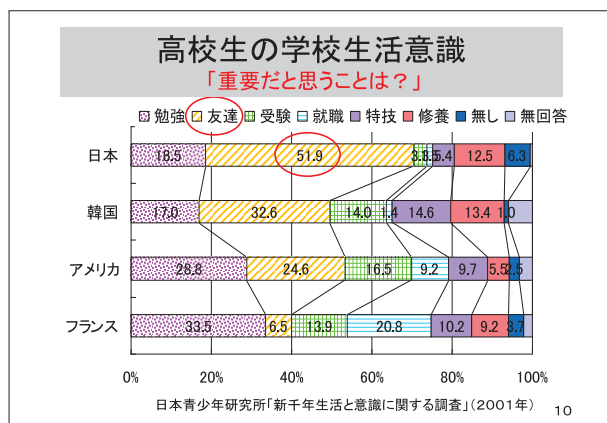
さて、ちょうどその頃、トーマス・ローレンは日本の関西の5つの公立・私立高校を調べました。私立には灘中・高が入っています。公立は商業高校も入ったりしているのですが、全部において同じような現象がみられます。いわゆる日本の高校生たちの、高等学校の序列化です。序列化が物すごくうまくいっていた時代なのです。高度経済成長時代ですから、別に商業高校、工業高校に行こうが、そこからちゃんと仕事もあり、未来があったのです。

ところが、現在はそれが厳しくなりました。簡単に言えば、みんな同じようなところに置かれ、同じ1つのものを求めるような時代になりました。「日本の高校」は、うまくいったけれども、同時に失敗もしているという意味合いなのです。最高にうまくいった裏側で、それが大きな問題を生んで、それ以来改革されていない現状を嘆いて、今やっと改革が進められようとしていると捉えればどうでしょう。



これは文科大臣などもよく使うデータですが、自分に価値があると思う日本の高校生の割合は3割です。最近の調査では4割ぐらい。割合は少し高くなりました。と言っても、これで良いのかどうか、これは他国と比べるしかないでしょう。他の国は自己過信かなというような感じもしますが、「日本

の高校生が、自信がなさ過ぎるのは、受験勉強があるからではないか」と言う文科省の関係者がいましたけれども、本当にそうなのかということです。



「新千年生活——」なんて大げさですけれども、これは同じ日本青少年研究所の2001年の調査です。これを見てどうですか、日本の高校生は。一番気にしているのは「友達」でした。51.9%。フランスの子供たちは「友達」を全然気にしていません。一方、日本で「受験」を気にしている子なんて3%ちょっとです。受験勉強が大事だと思っていないというか、「受験は必要悪」ぐらいに思っているような感じもします。ほかの国の子はそれなりに「受験勉強も大事だ、意味をもつ」と思っています。何で日本の高校生だけが「友達命」なのでしょう。これはもう本当に日本全体の——大人もそうです。皆さんもそうでしょう——同調圧力というのでしょうか、同じようでないといけないという社会の中で生きているわけです。皆さんも、同じ教員仲間同士で同じようでないとかははじかれてしまうのではないかと、そういう気持ち強い社会だと思いませんか。子供たちはもっとそれを感じているわけです。

加賀乙彦という文筆家で精神医学者の方がいて、彼はフランスと日本の精神科の病棟で勤めたことがあるのです。フランスでは「ほかの人と同じだと言われた」と言って精神科に来るのだそうです。日本の場合には「ほかの人と違うと言われた」と来るというのです。これわかりますか。そのぐらい真

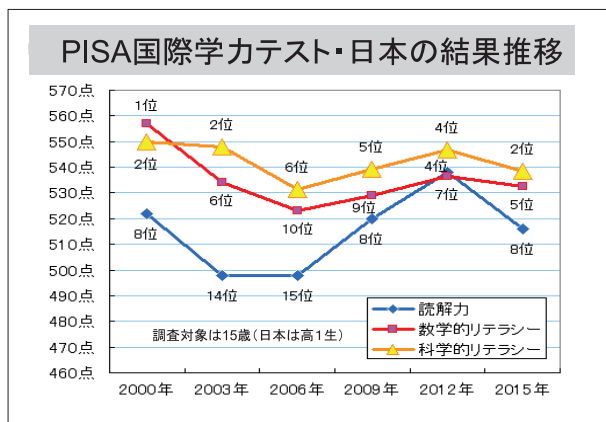
逆なわけですね。個人主義のフランスと、全体主義というか同質集団でないといけない国の違いではないでしょうか。

このデータには部活がありません。何で部活という項目がないかわかりますか。ほかの国には部活がないからです。先進国の中で部活動をやっているのは日本ぐらいですから。ほかの国はクラブチームです。スポーツは社会が、市民が支えるわけです。

というようなことから、日本の学校教育が世界の標準だと思っていたら、これは大間違いなわけです。そういう中で我々はグローバル化と言っている、子供たちを育てているということです。

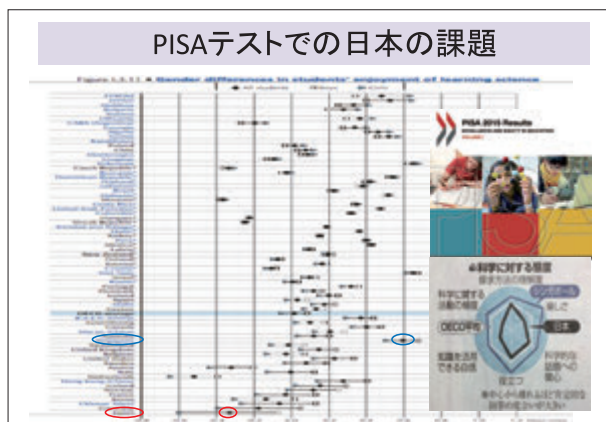
この強い同調圧力を受けている子供たちにも、いい面があります。友達を大事して、みんなを思いやり、みんなで頑張ろうということですから、これを活かさない手はないのです。それを活かしましょう。長所と短所は表裏ですからね。これはほかの国にはまねはできないのです。

そういう意味では、この日本の教育のすばらしいところ——ほかの国の先生たちはやらない部活もすばらしいですよ。働き方改革のものすごく大変なところになっていますけれど、ある程度日本のよさとしては理解しないといけないのではないのでしょうか。



子供たちの内面の話をしました。今度は学力のほうです。日本の子供は本当に教育改革をしなければいけないくらいだめなのか。そんなことはありません

せん。OECD(経済協力開発機構)が3年置きに調査する世界学力調査(PISA)が、2000年以来、基本的な読解、数学、科学的リテラシーなどを調べています。



日本の子供はほとんどトップレベルです。OECD加盟国その他ある中でずっとトップクラス。だから、改革は要らないのです。要らないのに、なぜ改革しなくてはいけないのかというと、これ(資料)です。これはサイエンスに対して関心のある度合いを調べたものです。簡単に言えば、科学が好きか、理数が好きかと聞いているのですが、明治以来日本を興してきたと言ってもいい理数、残念ながらその理数への関心が世界でほぼ最低です。PISAテストを受けているのは、世界では15歳となっているのですが、日本場合は全国の高校1年生から6,000名に協力をお願いしています。

リケジョなんていうものは、このデータを見る限りほとんど存在しません。世界的に見て少ないのです。これが問題なのです。ものすごくできるのに、世界でトップレベルなのに、好きではないのです。楽しくない、やりたいと思っていない、役に立つと思っていないのです。これはもったいないではないですか。この矛盾なのです。ですから、受験勉強というある種の偏ったものが影響しているのではないかと、さまざまな問題意識が高まっていったわけです。

結論から言うと、理数は探究的にやらなければおもしろくないのです。教科書があって、正解があって、世界中の誰もが信じてわかっていることだけ

覚えて、これが答えです——とやっても、面白味なんか無いではないですか。部分的にはあるかもしれませんが。未知のこと、新しいものを自分で発見していこうという探究的なものになっていない限り、おもしろいと思わないのは当然です。こうして、学び方が問題ではないかということに結びついていったわけです。そういう背景があって、高校の教育課程が2、3年後に大きく変わります。

<i>Universities</i>			2012
• Oxford	12 th C	48	
• Cambridge	13 th C	88	
• Univ. Paris	13 th C	47	
• Heidelberg	14 th C	54	
• Harvard	1636	46	
• Yale	1701	49	
• U. Pennsylvania	1740	28	
• Princeton	1746	35	
• Columbia	1754	80	
• MIT	1861	77	
• U. Tokyo	1876	8	
• Stanford	1891	54	

さあ、世界の大学をみてみましょうか。世界の大学ランキングではありません。これは古い順です。一番古いのはオックスフォード、それから400年前にできたのはハーバード、東京大学は140年前にできた。少しおくれて同じ頃にできたのはスタンフォード。

上の写真はハーバード大学です。ハーバードは最初にできたアメリカの大学だけでも東京大学の初期と同じで、分立しているのです。町全体がハーバードの町みたいになっている。入り口はどこかわからないのですが、これが1つの正門みたいにも見えますが、やはり狭き門ですね。下の写真は言うまでもないですが、東大です。

真ん中の数字は何か。ノーベル賞の受賞者数です。関係者がどれだけノーベル賞を出したかということですね。欧米の大学では、学生も大学を移りますし、教授もよく異動しますから、どこの大学の受賞だと言い切れないわけですが、純粋に数えたときに、これだけの違いがあります。日本の東大がい

くら頑張っているとか、京大が最近すごいと言っても、まったく桁違いです。こういう状況の中で、これからの子供たちを育てるわけですので、東大がトップだなんて思って教育していいのかという話です。

米国大学における出願書類



生徒が入力するもの	高校教員が入力・作成するもの								
● プロファイル (Profile) ● 家族情報 (Family) ● 学業成績、受賞歴 (Education) ● テストスコア (Testing) ● 課外活動歴 (Activities) ● パーソナル・エッセイ (Writing)	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td>SR</td> <td>● 成績証明書 (Transcript)</td> </tr> <tr> <td>CR</td> <td>● 推薦状</td> </tr> <tr> <td>TE ①</td> <td>● 推薦状</td> </tr> <tr> <td>TE ②</td> <td>● 推薦状</td> </tr> </table>	SR	● 成績証明書 (Transcript)	CR	● 推薦状	TE ①	● 推薦状	TE ②	● 推薦状
SR	● 成績証明書 (Transcript)								
CR	● 推薦状								
TE ①	● 推薦状								
TE ②	● 推薦状								

○ 筆記試験の得点で合否を決定する方法は使いません → 高等学校で得られる機会には大変大きな差があるからです。全員が同じ試験を受ける場合、教材の半分しか学習していない学生がいて試験の得点が低くても、教材をすべて学んでいるが創造性が低く、異なる領域を統合することができない学生より将来有望である可能性があります。我が校にとって優れた学生を真に選び出すような試験は存在しません。

＜ハーバード大学・アドミッションオフィス＞

ちなみに、アメリカの大学に出願する場合、成績証明書だけでいいのです。あとは進路指導の先生などを含めて、それなりの人の推薦書が決め手になります。とにかく学校の先生がやることは非常にシンプルです。第一に何が大事かという、本人です。本人が自分のことを証明する書類を全部出すのです。

アメリカでは各大学のテストはありません。各大学で個別にやっているのは日本ぐらいです。SAT とか ACT という、年 7 回ぐらい行われる共通テストのようなもののスコアを出せばいいのです。WEB を使って自分で出します。これは主体的でしょう。

では、ハーバードはどうやって入学者を決めるのか。ペーパー試験なんかで決められるはずはないと言うのです。優秀な学生を世界中から集めるのですから、天才的な人もいればいろいろな人がいます。民族性に配慮して、あえていろいろな人を入れる。多様性が失われてしまうから、同じ 1 つの高校から 10 人以上入れるようなことは、少なくともハーバードはしないのです。いろいろな民族の人を入れて、多様性の中で、その成果としてノーベル賞が生まれてくるわけです。

創造性——これは大事です。異なる領域を統合することができるかどうか。これは東大のアドミッション・ポリシーにも書き込んであります。異なる領域、複数の領域のものを結びつけて考えられるかというメタ認知的な発想です。こんなことができる人のほうがいいのだと。

アメリカのトップの大学に行って、アドミッション・オフィサーに聞くと、大体言うことは同じです。入れる人の条件は、大学と社会に貢献できる人物かどうか、それだけです。大学に貢献できるというのは何か。それにはいろいろありますが、1億円寄附すれば入学ができるという私立のハーバード大学でも、卒業することは保証しません。

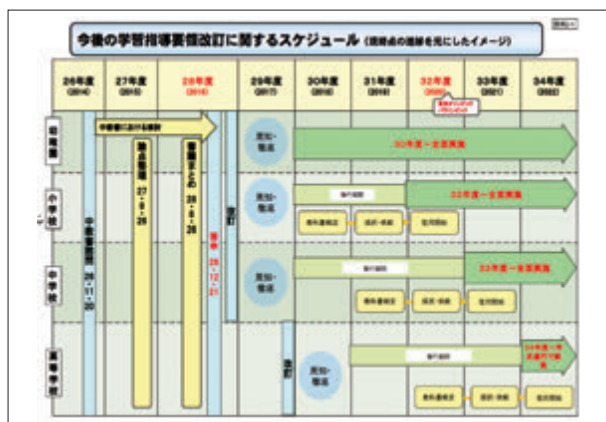
昨年、日本の大学は寄附問題で随分やられていましたけれども、言うまでもなく個人が貰ってはだめなのです。ちゃんと大学に寄附をして、大学がそれを学生のために使えばいいわけです。ということで、ハーバードなどは非常にはっきりしています。将来その学生がお金持ちになって寄附をしてくれればいいのです。

ちなみに、アメリカの大学の年間学費は、今500万から700万ぐらいになっています。寮費が100万から150万です。年間ですよ。誰が払えるのでしょうか。払えるのです。ハーバード大学は4兆円も基金があるのです。外国人であつてもほとんど奨学金で過ごせます。ただし、サボっていたら奨学金は出ません。アメリカのトップ大学の90%以上の学生は寮に入っています。キャンパス内に寮があつて、そこで必死に勉強するのです。サボっていたら奨学金が即出なくなるから。

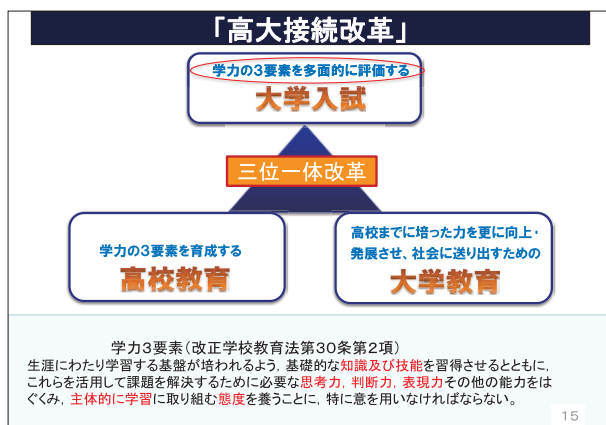
東京大学には基金がありません。国からもらっている年間3,000億円ぐらいでしか運営できないのです。私立のMITの研究費は年間1,500億円、東京大学の研究費は300億円弱です。これではなかなか勝てません。

日本の大学は入ったら、失礼ながら後は「ところてん」です。これは良くないですね。日本の場合には入るまでを問題にしていますけれども、入ってからどれだけやれるかということが、これから実力本位の世界で生きていく上で、本当は子供たちに求めなければいけないことです。何か卒の中に入ることだけを考える育て方をしてはいないでしょうか。

3、教育課題の一斉改革開始



3つ目です。「教育課題の一斉改革開始」——。そういうことで、どんどん教育改革が始まりました。大学入試改革、これはずっと私もかかわってきていますので、本当はたくさんお話をご紹介したほうがいいのかもしれませんが、きょうは初任者研修として大学入試改革案の概要版を1枚だけご用意しました。



要は、大学入試で学力の3要素を多面的に評価するとしたのです。学力の

3要素とは何か、皆さんわかりますか。改正学校教育法第30条。平成19年に法律を改正して、学力を定義したのです。学力を法律で定義している国は、日本だけです。

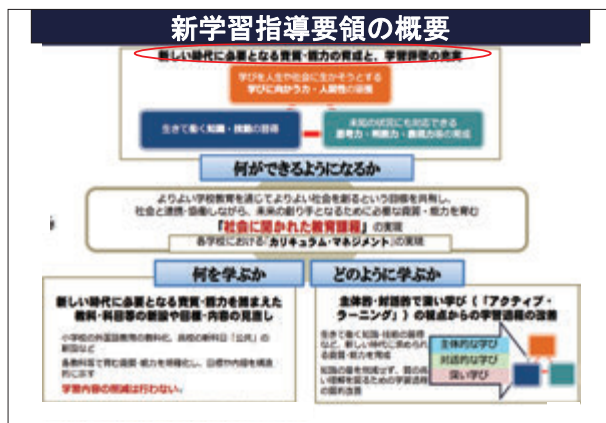
つまり、学力、学力とみんな言っているけれども、お互い違うことを言っているかもしれない。学力をちゃんと見ているかどうかというときに、その意味するところを決めておかないと、大学入試でも従来のペーパー試験だけで測ってしまって、それで終わりとすることになりかねない。それで、3つの要素として厳格に定義したのです。

まずは「知識及び技能」——リンダ・グラットンが言っていたことと似ています。それから、「思考力、判断力、表現力その他の能力」。最近やたらと聞くようになりましたが、最初は何だろうと思いました。随分と抽象的でしょう。それに「思考力」はよく聞きますが、「その他の能力」は全然触れられません。

また、これらは何のためなのか、ということを考えないで「思考力が大事だ」と言っているわけです。ここです。「課題を解決するために必要な」——このための「思考力、判断力、表現力」です。これが抜けて、目的がわからずに「思考力をつけよう」なんて言っていると、「何だろう、考える力、表現する力、プレゼンする力かな？」なんて、そうになってしまうわけです。そうではないのです。これは課題を解決するための力なのです。ここがポイントです。あと、主体的な態度。ここをまた大学が勝手に解釈して、ちょっと混乱しているのです。これについては後で触れます。

2019年度、中学校の教科書の検定が始まります。高校も今年4月から移行期が始まっています。この間に前倒しでやることとして、「総合的探究の時間」が始まりました。

小学校では来年から英語をやらなくてはいけなし、プログラミングもやらなくてはいけません。今、先生たちは大変です。よくマスコミが騒いでいますね。ほとんど全ての小学校の新しい教科書にQRコードがついたのです。タブレットでも何でもいいですが、かざして、補助教材をネット上で調べるわけです。そうやって学習を進めることになった。小学生がやっているのですから、中学、高校でやらないはずはないでしょう。ICTを使わないで教育なんかできないことになりそうです。



そんなスケジュール感ですから、皆さん、ただ眺めていては大変なことになってしまいます。何がどう変わろうとしているのかだけはつかんでください。案外皆さんより先輩の方が知りません。皆さんのほうがフレッシュですから、きっとわかっていただける。大学で学んでいる可能性もありますから、皆さんが先輩に教えてあげてください。

さあ、何を学ぶか。内容です。ゆとり教育のときにたたかれたものですから、文科省は減らしません。減らさないのはまあいいのです。いずれにしろ、これは内容ですから。そして高校では探究学習を始めるということが一番の眼目になります。どのように学ぶか。これはアクティブにやらなくてはいけない。

高校の先生も4、5年前はまだほとんどやっていなかったのですが、今アンケートをとると8割以上の先生は「アクティブにやっています」と言うのですね。大学の先生も6割方「アクティブにやっています」と言い切ります。今、大学の先生で映像を使わない先生はいないですね。

でも、いくらアクティブにやろうと、内容、コンテンツに対するメソッド、方法です。目的はここなのです。主体的、対話的、深い学びによって——その矢印の先、この3つは何かというと、上に書いてあります。ここがポイントです。「新しい時代に必要な資質・能力」の育成とその評価です。

学力3要素とは違うのかなと思うかもしれませんが、中身は似ています。ここには「知識・技能」、そして「思考力・判断力・表現力等」と書いてある。

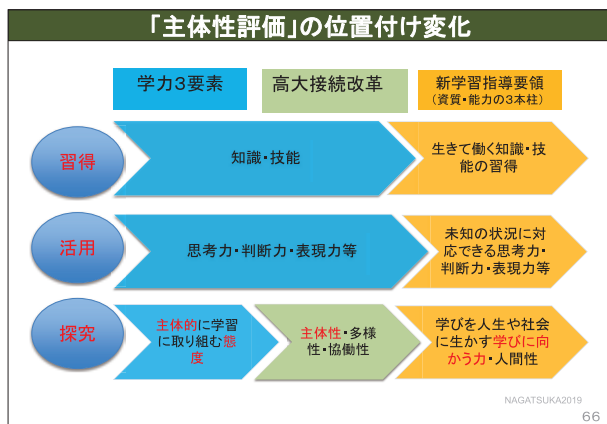
この部分（「学びに向かう力・人間性」）がちょっと違う。人間性はさすがに学力とは言えませんが、ここで「人間性」も入ってきました。この3つを合わせて、資質・能力の3本柱といいます。これをどうできるようになったかを評価することが、ものすごく難しいのです。

この資質・能力は、コンピテンシーとも言います。このコンピテンシーベースの教育がOECDを初めとして世界中で始まっているのです。文科省もこのコンピテンシーベースの教育にもっていきたいがために、この改革をしようとしているのですが、一般的にはこれがなかなかわからないのです。

文科省付きのマスコミの記者たちに「このコンピテンシーによって、これから特に高校教育が変わります」と言ってもびんとこないの、記事を書けないのです。世界中でコンピテンシーベースの教育にもう変わっているということがわからないようなのです。教育現場もそうですが、内容をどうするかとか、方法をどうするかとか言っていますけれども、このコンピテンシーの理解が止まっている限り進みません。

しかし、社会に開かれた教育課程にするというのは、カリキュラム・マネジメント、カリマネなんて言いますが、これは地域性もあるし、私学だったら私学のそれぞれの子供たちの様子も違いますから、学校ごとに変えていいのですよということを言っているわけです。

仮に資質・能力の3本柱だけで日本国民全部同じようにと言われたら、全ての学校が同じになってしまうではないですか。冒頭でご覧いただいた東京



のあの私立学校の多さ、あれは私学の自主性・独自性を表しているのです。近代教育の中で、私学がいかに自主的に、独自に教育を始めてきたか。そういう私学のように、公立もなっってくださいということをこれは言っているのです。公教育を各学校が考えて、というのがカリキュラム・マネジメントです。

実は大学入試に関心のある人は混乱しているはずなのです。学力3要素では、主体的に学習に取り組む態度が求められているのですが、大学入試改革では主体性・多様性・協働性を求めている——早稲田もそうですね、21年の入試で、全ての受験生にWEB上で主体性・多様性・協働性に関する経験を入力することを求めることを昨年の5月末に発表しました。

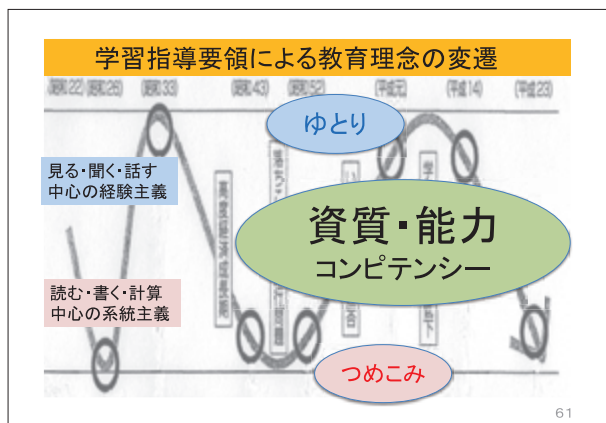
主体性・多様性・協働性のうち主体性については高校現場も考え方として成り立っています。でも、多様性・協働性までは基本的にかバーしていないのです。大学が、主体的に多様な人と協働して働いたり学んだりできる力があるかどうかをみたいと言うけれども、これは社会が大学に求めている力なのです。

それをディプロマ・ポリシー、つまり卒業要件にもしたいものだからアドミッション・ポリシーにおろすという3ポリシー方策が大学の改革になっていて、ディプロマ・ポリシーにある主体性・多様性・協働性をアドミッション・ポリシーにも入れ込んでしまっているわけです。でも、高校現場はそんなことを意識してやっていますか、今の高2生まで。多様性・協働性について、子供たちは書けますか。問題はそういうことです。

そこで、次の指導要領改訂ではこうなっているのです。「学びを人生や社会に生かす学びに向かう力」、これまで混乱していることが文科省の中でもわかって、縦割りの高等教育局と初等中等教育局の間で調整したのでしょうか、こんな言葉で3本柱をまとめたのです。

次に行きましょう。

これは学習指導要領の変遷ですけれども、皆さん、指導要領を見たことはありますか。何百ページもあります。高等学校の先生は、自分の教科の指導要領でさえ8割方みていないそうです。管理職でさえ総則、その辺を見ただけで教員をやっているのです。これに沿って教育が行われているはずだけど。中には教科書の解説編が指導要領ではないかと思っている人が少なからずいるのですが、そうではないですね。



近代教育では、考え方としてスタイルは2つしかありません。この辺はきっと大学でも勉強されたと思うのですが、1つは読む・書く・計算、詰め込み型で進む系統主義です。

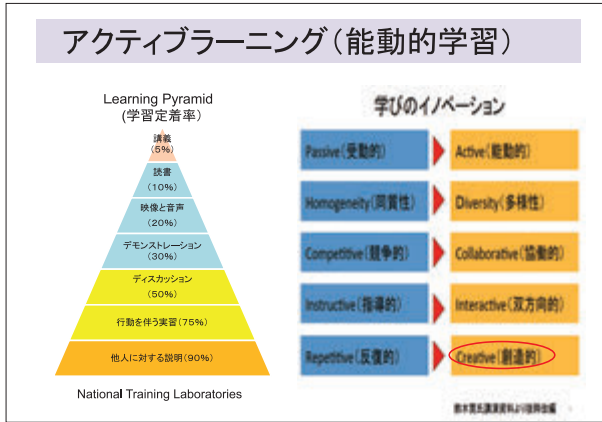
もう1つは経験主義です。大正期につくられた私立中高などは、進歩主義教育などと呼んで、経験主義的な教育を実践してきました。経験主義的な教育は、ゆとり教育と言ってもいいかもしれません。特にそれは、一貫教育の中だからできるものです。そしてこの2つのスタイルの中で指導要領は動くのです。

日本とアメリカでは指導要領の改訂——教育観の位相は、いつもずれるのです。日本でうまくいっていると思うと、アメリカでまねして、アメリカでうまくいっていると思うと日本がまねをする。あるいは詰め込み教育でいじめ問題が起きたから、ゆとり教育にしようとか。外国の情勢と国内事情で指導要領が常に10年置きに動いてきているのですが、そろそろこの二項対立はやめようではないかというのが今回の改革です。

それがこれです。資質・能力型の新しい教育観、コンピテンシーです。この新しいコンピテンシーベースの教育に変わろうということなので、これが一体何なのかわからないとこれから苦労するのではないのでしょうか。

これはラーニング・ピラミッドという、最近をよくいろいろなところで出ていますが、アメリカの大学で研究された非常にアバウトな研究成果の内容です。私がこうやってお話ししていることについて、皆さんがお帰りになる

アクティブラーニング(能動的学習)



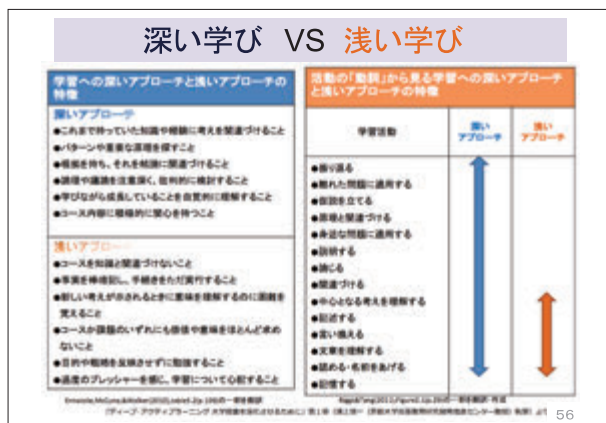
頃には、覚えていることは5%ぐらいになってしまうというわけです。私は皆さんにお話ししていますから、帰りの電車の中でも大体きょうはこんな話をしたというのは覚えていますけれども。

授業でも一方的に聞くのではなくて、ディスカッションをしたりデモンストレーションをしたりすれば学習定着率が上がる。こういう研究成果なのです。ですから、双方向でやりましょうというものですが、これは実証的というか経験に合っていますね。

もう1つ、今までの20世紀型の教育は、あえて言えばこれ(左側)です。それを全部右側に変えていきたいと思いますという旗印です。Interactive(双方向的)にやるとか、collaborative(協働的)に、Active(能動的)にやる。どのようにやってもいいのですけれども、最後はCreative(創造的)にやらないといけない。これは概念的にこれからの教育の方法論を表していると思います。

それから、これは深い学びとは何かというときのリストです。京都大学の先生で今度私立学校の理事長になりましたけれども、溝上慎一さんのまとめは非常にわかりやすいです。

こちらは浅いやり方です。単に記憶するとか、記述し理解するあたりまでは。これらは深い学びにも必要であるけれど、仮説を立てたり、原理と関連づけたり、身近な問題に適用するということまでやらないと本当に深い学びにならない。これはもうスキルですね。皆さんがきょう明日やらなければ



ならない、深い学びに向かう方法論です。授業の中で取り入れられるかどうかです。

双方向的な学びというのは意外と簡単です。PILという方法がありますが、授業中に生徒に「はい、では2、3分隣の子とそのことについて話し合っ」てとやるだけで、これで双方向になるのです。先生と生徒全体が、私と皆さんが双方向でやるとなると相当な力量が必要です。皆さんも全員は話せないけれども、お互いに隣同士でやれば、その2人同士でやったもの、グループで話し合ったものを誰か代表が発表してとか、そうやっていくと双方向化するではないですか。あまり大それたことを考えない。先生が自分で全部双方向を引っ張ろうなんて、そんなことを考えないでいいのです。

PBLという方法は、問題ベース、課題解決型です。これは結構大変です。でも、これもやらなくてははいけない。これは問題を中心に考えるから、特にグループの場合にはみんないろいろな意見を出せるのです。

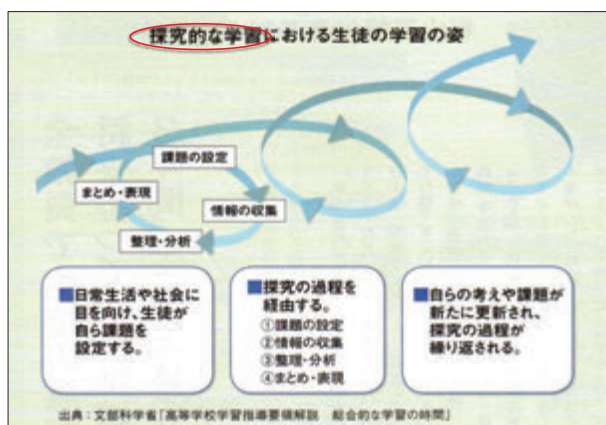
ハーバードの医学部の話になるのですが、医師や看護師、いろいろなスタッフが集まって、みんなの知恵、経験を生かしてチームとしてやらなければ現場の医療問題は解決しないということから始まりました。その問題、課題を解決するために医学部だけでなく、教育学部や他の学部も巻き込んだ。そして今、そのやり方が世界中の大学に普及してきたのです。

東京医科歯科大学の先生は短期留学も含めて80人以上ハーバードの医学部に勉強に行っています。PBLの勉強に行っているのです。大学も学び方

が変わってきているのです。深い学びをするということについて、その方法論にいろいろな人が取り組んでいます。

4、建学精神が私学の魅力に

最後です。「建学精神が私学の魅力に」——というところですが、まずはこんなものを挙げました。高校の学びが大変なのです。この4月から始まった総合的探究の時間は、多くの学校が、現状おさなりにやっています。進学校ほど、普通科ほど。でも、だんだんそれで済まなくなります。



大学が本当に求めるかどうか、まだいぶかっているかもしれませんが、調査書にもちゃんと書くのです。探究的学習をどうしたか、やり方はどうだったか、その評価はどうかと。探究というのは、こんなふうに進めなければいけないのです。まず自分が課題をみつける、情報を集めて分析するのです。それを自分の考えでどんどん繰り返していく。結論をまとめて、どうも違うということがわかったら、また情報を集めて繰り返す。こういう繰り返しの中でしか探究は進まない。でも、これが課題発見、課題解決でしょう。

課題を発見して解決していくプロセスが、これからの学びの核心なのです。基礎的な知識・技能を活用して、課題を解決するための勉強を子供たちにさせようではありませんか。主体的に学ぶ態度なんて言わなくても、おもしろければ主体的にやっていきますよ。そういうことなのです。

理数探究とか世界史探究という科目を新しくつくるということは、もしかしたら聞いているかもしれませんが、新しい指導要領の教育課程の中身について、すべての教科目で、500人以上の委員がまずその教科、科目ごとの問題点を出したのです。そして端的に言えば、仮説を出して、解決のためのプロセスを考えるような仕組みで、教科書ができようとしています。

課題を考えて、仮説を考えて、情報を集めて、分析して自分の考えを出していくというプロセスが教科書に入れ込まれてくるはずです。教育課程を考える人たちが、自分たち自身の課題意識をつくり上げていく過程でそうやったのです。ということで、特に高校生に対する学びは、2、3年後からこうなっていきます。これは全ての教科目です。ですから、皆さんは十分にウオッチしてください。

オーストラリア・ブリスベンの高校における 教科授業のassignments(研究課題)

- ・ ビジネス(科目)の課題
「インドにIKEAを建設するにあたって、何が重要か」
- ・ 経済の課題
「ある家族の一番希望に合う家を、経済的な視点から調査、分析する」
- ・ 生物の課題
「大腸菌を殺菌するのに、どの物質が一番効率が良いかについて根拠を示して論じる」
- ・ 英語(日本の国語)の課題
「Jasper Jonesという400頁ある本を読んで、物語の内容を変えず、空間を見つけて自分の物語を加え、小説をもっと面白くする」



ちなみに、オーストラリアやニュージーランドはコンピテンシーベースの教育が非常に進んでいて、例えば教科の中でしばしばこういう課題が出るわけです。ビジネスという経済科目の中で「インドにIKEAを建設するにあたって何が重要か」とか、国語では「物語を自分でつくり変えてみて、おもしろくしよう」とか。このような自分なりの探究成果に対して評価が出る。これが課題解決型の学習になるわけです。そして教科の評価にもなる。というところまで、さて、我々はもっていけるだろうかということです。でも、はっきり言えば、こういう学びが他国では始まっているのです。

多様な評価方法の例

児童生徒の学びの深まりを把握するために、多様な評価方法の研究や取組が行われている。

「パフォーマンス評価」
知識やスキルを使いこなす(活用・応用・統合する)ことを求めるような評価方法。論説文やレポート、展示物といった完成作品(プロダクト)や、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演(狭義のパフォーマンス)を評価する。

「ルーブリック」
成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語(評価規準)からなる評価基準表。

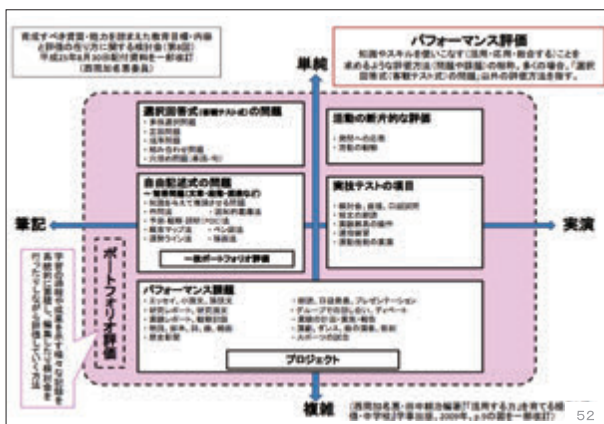
項目	1	2	3	4
内容	……できる……している	……できる……している	……できる……している	……できる……している
表現	……できる……している	……できる……している	……できる……している	……できる……している

記述語 ルーブリックのイメージ図

「ポートフォリオ評価」
児童生徒の学習の過程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等に集積。そのファイル等を活用して児童生徒の学習状況を把握するとともに、児童生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示す。

これをやるためには、パフォーマンスとかそのポートフォリオ、生徒が蓄積したものや生徒がやったことを評価するためのルーブリックが必要です。どうことができるかという、できているレベルの評価基準です。

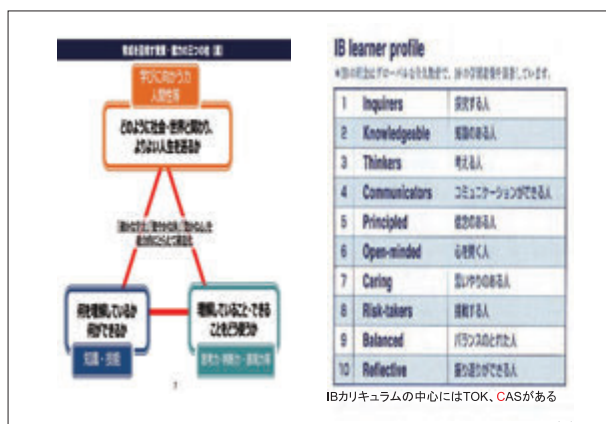
CEFR という言葉を聞いたことがあると思うのですが、ヨーロッパには言語がたくさんあったので、20 年かけて、それぞれの言語力（英語に限らず）がどの程度なのかを示す度合い、達成度を示す基準として CEFR ができました。「何々ができる」という記述でルーブリックは表すのですが、例えば偏差値が 60 というのはその集団の中の相対的位置であって、具体的に達成した中身はわかりません。つまり、絶対的な達成度をはかる指標をもたなけ



れば、実はその学力を評価したことにならないのです。

ほとんどの学校では5教科の場合、選択解答式及び一部記述を入れた定期テストで完結しているわけです。でも、この中にも実技系の教科の先生がいらっしゃると思うのですが、ペーパー試験で体育や美術の力を測れませんよね。多少は測れるかもしれませんが、ちゃんとパフォーマンスも見ているわけです。実際のものを見る。これはパフォーマンス評価と言っています。ポートフォリオはそうしたものの記録物ですが、確かに試験もその1つなのです。定期テスト、小テストもポートフォリオの1つであるけれども、それ以外のものを含めて全体でポートフォリオと言います。全体を通して評価しなければいけない。

杉並区に文化学園大学杉並高等学校という学校があります。この学校のダブルディプロマコースでは、日本の教育課程と同時にカナダのブリティッシュコロンビア（BC）州の教育課程も勉強しているのです。カナダのBC州の教育課程の評価はペーパー試験が最大20%で、残り80%はペーパー試験以外で評価するのです。しかし、これが世界基準です。皆さんは恐らく80%ペーパー試験で評価しようとしているでしょう。我々はそのように教育されてきている。平常点が20%ぐらいだと思っているのです。逆なのです。ペーパー試験をどうつくるかということではなくて、日常的な生徒の評価をどうにかしないと、探究の評価なんてできません。このようなことを考えておく必要があるということです。



IB、インターナショナル・バカロレアですが、これから首都圏には多数できそうです。これは非常にライバルですよ。BC 州ではなくて世界基準の I B の教育課程をやる学校です。一番上に「探究する人」と書いてあります。これを資質・能力の一番に挙げている。IB の人は探究の重要性をわかっているのです。

そのほかに思いやりとかいろいろありますけれども、世界中の IB 校の先生たちは年中、拠点校——例えばアジアでいえばシンガポールあたりに集まって、教科においてもループリックでどういう評価をするか、いつも勉強している。立派な教員はいかに評価軸をもっているか、これに尽きるのです。評価レベルが明確であるということです。

そして、これは IB 教育の学習者像といいます。私もすてきだなと思うのですが、探究とか知識のある人、これは子供だけに求めているリストではないのです。先生もこれができていない限り、生徒には絶対そんなことは教えられない。保護者もこれを求めてくださいというのです。つまり、大人と子供が共通する目標、資質・能力なのです。我々に探究心が無いのに、子供たちに探究しろなんて言えないですよ。

高校が掲げる教育目標のカテゴリー

	私立高校	公立高校
1 心の豊か 意欲中心	67.2	64.6
2 意欲 自主 主体性	64.3	64.3
3 人間性	64.8	51.8
4 思いやり	55.6	49.9
5 社会性 協調性	54.9	48.3
6 読解力 読書力	53.7	46.8
7 自ら学ぶ力 自己学習力	52.7	46.6
8 学力向上 学力定着	51.1	41.2
9 生きる力	50.8	40.5
10 基本的学習習慣	45.8	37.7

(出典：「ベネッセ教育総合研究所」『高校教育の未来と課題』(2019 年))

ループリック事例

資質・能力「社会性」
評価項目「あいさつ」

- 1： 思いやりや生徒から声をかけられず、ほとんど言葉がでない。
- 2： 思いやりや生徒から声をかけられれば、返事ができる。
- 3： 思いやりや生徒であれば、自分から進んで挨拶ができる。
- 4： 特に思いやりなど、優美な生徒に対し、自分から挨拶で挨拶ができる。
- 5： 自分であれば、仲間からの挨拶にも積極的に笑顔で返すことができる。

Human Link

最後の資料ですが、比較的最近ベネッセさんが公立高校と私立高校の教育目標を分類して、多い順に並べてくれたのです。ところが、どうも似ているのです。困ったもので、あまり変わらないのです。少しの違いはありますが、

でも、どうですか。本当に問題なのはこれを本当に実現しているかどうかなのです。

たとえば教育目標に「社会性」があるとして、具体的には「社会性」の基本は「あいさつ」ということになるでしょうか。そのとき必要となる指標、これがループリックです。ここで、親しい友人や生徒から声をかけられてもほとんど返事ができない、これは1です。親しい友人か先生から声をかけられれば挨拶できる、となればだんだん上がっていきます。1番評価が高い子は、校内であれば外部からの来訪者にも積極的に笑顔で挨拶できる。

皆さん、これどうですか。生徒に挨拶をちゃんとしなさいなんて、怖い顔で言っていないですか。挨拶を笑顔でできる先生は少ないですよ。でも、ここに例示したループリックは、幼稚園生や小学生のためにつくられた挨拶のループリックです。大人ができないことをどうして子供に言えるのでしょうか。

決まりごととして言う必要はないのです。「あなたの笑顔はすてきだね」とか「あなたから声を聞けてよかった」とか、そのように笑顔で言ってあげたら、もうそれだけで子供たちは「ああ、笑顔でやればいいんだ」と思うてはいませんか。そんなふうに先生たちが笑顔で子供たちに声をかけてあげてほしいのです。中高生や大人こそもっと必要です。

皆さんに最後に言いたいことは、それぞれの学校に建学の精神があると思いますが、それを抽象的に理解しているだけではなく、このループリックのように「何ができる」ということがその建学の精神で求めている資質が実現していることなのかを考える先生になっていただきたいのです。残念ながら、私も含めてこれまでの先輩たちはあまり考えなくても、建学の精神はこれだと、せいぜいその概念を言っておれば済んだのですが、これからの資質・能力の時代には「一体何ができることなのか」まで落としこんでそれを実現させてあげないと、建学の精神を実現した学校にはならないのです。

建学者がいて初めて皆さんがいるのですけれども、たとえば今年で創立185年目になる私の学校、185年前にこの創立者が私塾をつくっていなかったら私の学校はないのです。そして、私も今この場にいない。皆さんも同じです。皆さんがそれぞれの創立者と同じように、自分が今どう考えるか。明日どのようにするかということは、必ずその子供たちに影響を与えます。それが次の社会をつくる、歴史をつくっていくのです。

Thank you !



1 人の考えや行動が 100 年後、200 年後に必ず影響するのです。創立者の建学の精神が、実は皆さんをここに集めているわけでしょう。皆さんが学校に勤め、そしてこの場にもいる。それは創立者がその学校をつくったからです。その思いが変えていくわけですから、どうぞ建学の精神を本当に大事にしていっていただきたい。これが私学の魅力なのです。最初から、今も、これからもそうです。

私からのメッセージは以上です。ありがとうございました（拍手）。